

## ローマ2章 「神の正しい裁き」

### 1A 他人をさばく事に対するさばき 1-16

#### 1B 理由 - 同じ行ない 1-4

1C さばくときの物差し 1-3

2C 神の慈愛の軽視 4

#### 2B 内容 - 公正なさばき 5-11

1C 積み上がる罪 5

2C 行ないに対する報い 6-10

3C 神の公平さ 11

#### 3B 手段 - 良心 12-16

1C 滅び 12-13

2C 心の中の律法 14-16

### 2A 神の事柄に安住する者に対するさばき 17-29

#### 1B 神のことはへの安住 17-24

1C 状態 - 自負 17-20

1D 神との関係 17-18

2D 人との関係 19-20

2C 問題 - 無自戒 21-24

#### 2B 礼典への安住 25-29

1C 基準 - 神への従順 25-27

2C 内容 - 心の中の礼典 28-29

## 本文

ローマ人への手紙2章を開いてください。ローマ書2章です。ここでのメッセージ題は、「神の正しいさばき」です。

ローマ人への手紙のテーマは、「信仰による義」です。パウロは、自分が伝えている福音の中には神の義が啓示されており、その義は信仰に始まり、信仰に進ませるからだ、と言いました。そして、この神の義は、まず神の御怒りとして現われていることを1章の中で学びました。そして、2章はこの続きです。人に下っている神の怒りについて、それをないがしろにしている人に対してパウロは語っています。神の怒りを他人事のように受けとめ、自分は何らかのかたちで神のさばきを免れると考えることについて、パウロは、その過ちを正しています。

## 1A 他人をさばく事に対するさばき 1-16

### 1B 理由 - 同じ行ない 1-4

#### 1C さばくときの物差し 1-3

1 ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。

パウロは1章において、人が行なっている悪を並べ立てました。1章 29 節からですが、「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。(29-31)」このような不義に対して、もし、「ああ、これらは私のことを表現している。私はたしかに、神のさばきを受けなければいけないのだ。」と思うなら、パウロの意図が伝わったこととなります。けれども、私たちは、「これは、あの悪いことをしている人に当てはまる。」と他の人に当てはめようとします。自分は正しいのだが、他の人が間違っていると考えます。

けれども、パウロは、「そのように人をさばくことによって、自分自身を罪に定めていますよ。あなたは同じことを行なっているからです。」と言いました。少し状況を変えるならば、まさに自分がそのことをしているのですが、それに気づいていないのです。ダビデが罪を犯したときのことを思い出してください。預言者ナタンが、ダビデに、富んでいる人と貧しい人の話しをしました。富んでいる人は、貧しい人が育てていた、たった一頭の子羊を取り上げたことを話しました。するとダビデは、「そんなことをした男は死刑だ。その男は、あわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その子羊を4倍にして償わなければいけない。(Ⅱサムエル 12:6)」と言いました。そしてナタンは、「あなたがその男です。あなたは、ウリヤを殺して、その妻を自分の妻としたのです。」と言いました。このように、私たちは、他人をさばいているときに、自分も同じことをしていることに気づくのです。

2 私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。3 そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。

私たちは、他の人が悪いことをしているのを見ると、罰が与えられるのは当然である、と考えます。それは、パウロが後に取り扱いますが、人のうちにある良心のためです。その良心が、このような悪いことは神のさばきに値すると教えてくれます。

けれども、その良心によって、私たちが正しくなるのではなく、ただ、自分自身が神のさばきに値することを知らせるにしかすぎません。なのに、人はどうしても、自分だけは神のさばきをなんとかして免れる、と思っているのです。他の人にはきちんと、神のさばきのものさしを使っているのです

が、自分自身には用いないのです。だから、パウロは、「その同じものさしを、自分自身に当てはめなさい。」と教えています。他の人をさばいている同じものさしで自分をさばけば、自分が神のさばきからは決して免れないことを知るので。

#### 2C 神の慈愛の軽視 4

4 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。

神が今、人々をさばかれないのは、神が慈愛と忍耐と寛容に富んでおられるからです。彼らが悔い改めるのを待って、耐え忍んでおられるのです。ペテロは、「主は、…あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(Ⅱペテロ 3:9)」と言いました。

けれども、この忍耐深さを神の弱さと受けとめるのが私たちの姿です。自分が悪いことを行なっても、特に裁かれている感じではない。だから、神は、私を裁く力は持っていないのだ、と考えるのです。イエスさまが十字架につけられているとき、人々が、「あなたが神の子なら、そこから降りて自分を救ってみるがよい。」と言いましたが、そのような態度を持ってしまうのです。「神がいるなら、今、殺してみろ。」と言って、死なないら、「それ言った通りだ、死んでいないから神はいないのだ。」とするのです。たった今死んでいないのは、神の慈愛によるものです。けれども、神の慈愛を軽視しています。

そして、ここで、「神の慈愛があなたを悔い改めに導く」とあり、神の憤りが悔い改めに導くと書かれていないことに注目してください。神が恐ろしいという理由では、決して悔い改めに導かれることはありません。恐ろしいと、逆に退いてしまいます。イエスさまの、タラントについてのたとえにおいて、主人から一タラントを預かった者がこう言いました。「あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。(マタイ 25:24-25)」またヘブル書には、「私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。(10:39)」とあります。ですから、神の慈愛、神のすばらしさに向かって、私たちは悔い改めを行なうのです。

#### 2B 内容 — 公正なさばき 5-11

こうしてパウロは、他人を裁くことによって、自分自身を罪に定めていることを話しましたが、次に、その神のさばきは正しく、公正であることを教えます。

#### 1C 積み上がる罪 5

5 ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。

問題は自分が正しくないということではありません。他人を裁き、そして自分が同じ罪を犯しているのにも関わらず、それを認めない堅くなさがあることが問題なのです。主はへりくだり、悔い改める者をすぐにでも、豊かな憐れみによってその罪を赦してください。「エゼキエル 18:23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。・・神である主の御告げ。・・彼がその態度を悔い改めて、生きることが喜ばないだろうか。」けれども、その頑なさや悔い改めないで、神は裁かれます。

神の裁きは正しいのですが、その理由は、罪が積み上がっているからだ、とあります。神は、私たちが生まれて此の方、行なったこと、思ったこと、話したことのすべてを知っておられます。知っておられるだけではなく、ご自分の書物として記録しておられます。一部ではなく全てのことが書き記されているので、正しいさばきができるのです。

ローマ書 14 章には、「私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。(12)」とありますが、この申し開きは英語ですと「アカウントを出す」つまり会計報告です。神の前に、自分の行ないについての会計報告を出さなければいけない。自分が行なったマイナス面、つまり罪は、すべて借金として記録されています。それに対して説明責任を持ち、返済しなければならないというのが、申し開きをすることです。私たちは、神という方をこのような裁き主として見なければ、なぜその罪の帳消しが恵みであるのか、それが良き知らせ、福音であるのかを悟ることはできません。多くの人がキリストへの信仰を持ってなくさせている、あるいは信じたといっても離れてしまうのは、神がすべての行いに対して、私たちに申し開きを要求しておられることを知らないからです。

### 2C 行ないに対する報い 6-10

6 神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。

神は公平な方です。他の者の犯した罪に対して連帯責任を取らせません。一人一人に報いを与えられます。ですから、「みな、このようなことを行なったから。」という言い訳もできません。神はそれぞれに自由意志を与えられました。他の人々がしていても、それをしないという自由意志が神から与えられています。それを用いることこそが、神の形の回復になります。

7 忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、8 党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。

神の正しい裁きは明らかです。忍耐すること、善を行なうこと、そして栄誉なことや不滅なこと、こうしたものを指向しているものの先が永遠の命です。けれども、党派心を持つことが、真理に従わないで不義を行なっていると言っています。これは、自分は正しいと自認し、自分を裁かない人にある特徴です。今、そうした人を取り扱っているのです。党派心は不義であり、そこに高ぶりやそしり、無慈悲などが伴います。その行き着く先は、神の怒りと憤りなのです。けれども、正しい人は忍耐

して善を行います。(この義は、後でキリストを信じる信仰によって与えられ、その実として良い行いがあるという議論になりますが、それは6章以降で出てきます。)

9 患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上により、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。

パウロがここで強調しているのは、二つのことです。一つは順番です、「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも」と言っています。もう一つは「すべての人」です。福音についても、パウロは1章16節で、「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と言いました。ここでパウロが言いたいのは、ユダヤ人は神に先に選ばれて、神の言葉が与えられたのだから、彼らにその応答への責任があるということです。多く与えられた者が、多く要求されます。そして、もう一つはユダヤ人だけの特権ではなく、ギリシヤ人つまり異邦人にもこの恵みが及ぶという、神の公平さです。

ユダヤ人は、自分たちが選ばれた民であり、それで自動的に救いに預かるとしていました。また異邦人は神の選びから外れているので、自動的に滅びに至ると思っていました。しかし、それは誤った神の捉え方です。

### 3C 神の公平さ 11

11 神にはえこひいきなどはないからです。

これが、旧約聖書にも啓示されている神のご性質です。ですから、ユダヤ人は自分たちもギリシヤ人と同じ基準で裁かれることを知らなければいけません。

私たちは、神の前に出る時に、神を印象付けることは決してできません。自分のしてきたことを良く見せたり、自分の家族のことも話せないし、自分の隣にクリスチャンがいたから、ということも言えません。

### 3B 手段 — 良心 12-16

そしてパウロは、異邦人がどのような量りによって裁かれるのかを語り始めます。ギリシヤ人が裁かれるというのが、異邦人にはユダヤ人のように律法が与えられていない。それでは、何を尺度に裁かれるのかという疑問が出てきます。そこで、パウロは、「良心」という言葉を使って、異邦人も正しくさばかれることを教えます。

### 1C 滅び 12-13

12 律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。13 それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう

者が正しいと認められるからです。

パウロは、律法を持っているユダヤ人は、もちろん律法によってさばかれることを話しています。ここで大事なものは、律法を聞いているだけでそれで自分が義とされるのではない、ということです。それを行なっているかどうかの問題であって、行なっていなければその律法によって裁かれるのです。そして次に異邦人がどのように裁かれるかを話します。

### 2C 心の中の律法 14-16

14 ・律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。15 彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。 ..

パウロは、異邦人の心には良心という善悪の秤が刻み込まれていて、それに従って裁かれると話しています。先ほど、他人を裁くことをパウロは咎めましたが、それは良心があるからです。「彼らの思いは互いに責め合ったり、弁明し合ったりしています。」と書いています。私たちには、聖書を持っていなくても、与えられている神の啓示があります。一つは自然でした。1章で弁解の余地はない、と言っていました。もう一つは良心であります。たとえ聖書を知らなくても、「これをしてはならない」という道徳基準を通して、なぜそんな基準が植えられるか不思議ですが、しかし万国共通に存在しているのです。そのことで、神がおられることを証明しているのです。

16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。

ここが大事な要点です。福音というのは、私たちの表面的な外側の行いを取り扱うのではなく、心の中のこと、人が見ていなくても独りでやっていること、こうした隠れたものも含めて、神が裁かれるという真理に基づいています。ここに至るために、人々は自分の内側が探られます。普段は、自分はそれほど悪い人間ではないと思っています。しかし、福音の言葉を聞くと、自分のあり方が、その心の中の状態が深く抉られます。裸の状態にされて、神の前で申し開きしなければいけないというところにまで導かれます。その光のところに来るか来ないかの、選択が迫られるのです。

### 2A 神の事柄に安住する者に対するさばき 17-29

ですから、1章では明らかに不義を行なっている者たちに対してパウロは語っていました。神を知らないという弁解はできないことを、「彼らは知っているのです」という言葉で言い表しました。そして2章1節からは、「他人を裁いている」という人たちに対してパウロは語りました。まだ、心の中を探っておらず、独善的になっている人々の心を責めています。そして17節からは、ユダヤ人教師に対してパウロは語ります。ユダヤ人に神の律法が与えられ、与えられていただけでなく教師

たちは教えもしていたのですが、それによって神の裁きから免れるのではないこと、また彼ら自身が罪を犯していることを明らかにしていきます。

#### 1B 神のことばへの安住 17-24

##### 1C 状態 - 自負 17-20

##### 1D 神との関係 17-18

17 もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、18 みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、

ユダヤ人教師にとって、律法を持つことに安んじていることが問題でした。先ほどパウロは、律法はそれを聞くから正しくなるのではなく、律法を行なうから正しくなる、と言いました。けれども、ただ律法を持っていることに安住してしまい、またそれを弁えている、理解していることを知っているから、それが神の前で義と認められる保障だと思っていました。しかし、知っていることと、それを実際に行っていることとは別なのです。

##### 2D 人との関係 19-20

19-20 また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にある者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、

これは、教えを自分から受けている人々のことを見下げている態度を、パウロは指摘しています。しかし教師こそが、そうではない人以上に、さらに厳しい裁きを神から受けるのです。ヤコブは、「私たち教師は、格別にきびしいさばきを受けるのです。(ヤコブ 3:1)」と言っています。

##### 2C 問題 - 無自戒 21-24

21 どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。22 姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいながら、自分は神殿の物をかすめるのですか。

自分自身を教えていないという問題です。ここで再び、人の判断が鈍っていることを、パウロは暗に示しています。例えば「盗む」という言葉について、マラキ書には、自分の生活に余裕があるときだけに、礼拝をし、献金をすることも盗みであると定義していますが、私たちはいつの間にか、人の物を盗むという外側の行為だけのものとして判断します。姦淫も、自分の心の中で情欲を抱いたら既に姦淫を犯しているのに、その心は放置しています。そして、偶像を忌みきらいながら、教会のものを自分のものにしていくことがあります。律法は、心の中のことにまで及んでいるのに、それを外側の行為として受けとめてしまっているのです。

23 律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか。24 これは、「神

の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている。」と書いてあるとおりです。

このようにして律法に違反する結果、私たちは、神を侮っていることとなります。神を知らない人々の間で、神のついでにイメージが格下げされてしまうのです。

## 2B 礼典への安住 25-29

このように、律法を持つことに安んじてしまう問題がありますが、それだけではなく、儀式に安んじてしまうことをパウロは次に話します。ユダヤ人にとって割礼の儀式はものすごい大事なものでした。

## 1C 基準 - 神への従順 25-27

25 もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。

割礼は、神がアブラハムと契約を結ばれるときに、契約のしるしとして行ないなさいと命じられたものです。この神の命令に従順になり、神からの約束を受け取れることを、象徴的に割礼という外側の儀式によって表します。したがって、割礼という儀式を行なっても、神への従順が伴っていないければ無意味である、つまり無割礼である、とパウロは言っています。

26 もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょうか。27 また、からだに割礼を受けていないで律法を守る者が、律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか。

割礼はあくまでも、内側で主に対して行なったことを外側で表すものです。ですから、内側での行いが伴っていないければ、その外側の儀式は無意味です。むしろ、外側の儀式を行っておらずとも、内側の行いをしているのなら、それは十分、その割礼の意味を表しているということにあります。

これは私たちキリスト者であれば、水のバプテスマが当てはまります。信じてバプテスマを受けることは、主イエス様の命令です。ですから、主に従順になるには、バプテスマを受けなければいけません。けれども、水のバプテスマを受けたからクリスチャンになるのではなりません。洗礼を受けて、それに安住しており、キリストに従っていないのであればバプテスマを受けていないのと同じことなのです。その反対に、罪を悔い改めてイエス様を信じたのであれば、まだバプテスマを受けていなかったとしても、その人は罪に対して死に、新しい命に預かった者とみなされるのです。

## 2C 内容 - 心の中の礼典 28-29

28 外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。29a かって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼

こそ割礼です。

パウロは、割礼の問題においても、隠れたところ、つまり内実が問題であることを指摘しています。福音は、この内実を取り扱っています。内実が伴っていなければ、外見は無意味です。「ユダヤ人」という言葉の持っている意味合いは、神を信じ、敬っているという前提があつてこそその名前です。もし内実がなかったら、ユダヤ人というだけで救われるのではないということです。御霊によって心の割礼を受けてこそ、真のユダヤ人です。

これはクリスチャンにも当てはまります。水のバプテスマを受けても、御霊による新生体験をしていない人は洗礼によってクリスチャンになるのではありません。御霊の新生体験によって初めてクリスチャンなのです。そして洗礼が、その新しい歩みによって初めて意味を持つのです。そして、パウロは、この章における結論を話します。

29b その誉れは、人からではなく、神から来るものです。

誉れは、人からではなく神からである。つまり、人間が判断する外見ではなく、神が判断する内実について取り組まなければいけない、とパウロは言っています。私たちが他人をさばくのも、また、聖書を学んでいることや、儀式を行なっていることに安住するのも、すべて、人間が判断している外側のことを相手にしているからです。神ではなく、人を相手にして生きているからです。私たちは神からの誉れを求めなければいけません。外側の行ないではなく、隠れたところをさばかれる神に対峙して生きなければいけません。それが神の福音であります。